

カトリック六甲教会 教会報

2014

10

No.514

2014年 アジアン・ユース・デー



カトリック教会の青年ら 2000 人が集う「アジアン・ユース・デー」(AYD、アジア司教協議会連盟信徒局ユースデスク主催)が今年は8月10日(日)～17日(日)に韓国の大田(テジョン)市で開催された。日本からは100人の青年が招待された。

アジアン・ユース・デーは、アジアの28カ国からカトリック教会の青年代表が集い、ホスト国の文化・社会と教会の福音的な取り組みに触れながら、典礼、体験学習、ホームステイ、文化交流、自国紹介など、8日間を共に祈り、共に学び合うカトリック教会のアジア青年大会。今年のテーマは「ASIAN YOUTH! WAKE UP! The Glory of the Martyrs Shines on You. (アジアの若者よ。目覚めよ! 殉教者の栄光があなたに輝く)」で、テーマを元に、①信仰の原点を思い出すこと、②信仰を再発見すること、③現代社会の証し人として、イエスと共に歩むこと、この3点を深めた。(CHRISTIAN TODAY より)

《参加者の声》をお届け致します。

AYDに参加して

私がAYDに参加してみて強く思ったのは、国が違って言葉が通じなくても同じ宗教だというだけで会ったときからみんなすぐに仲良くなれて宗教ってすごいなということです。AYDにはアジアの多くの国からの参加があり、いろいろな国の人と出会えたのでとても良かったです。

プログラムにはそれぞれの国の紹介などもあり、AYDに参加していなかったら知ることができなかった国の文化などを知ることができました。韓国の巡礼者のお話を聞く時間もあり、前までは宗教のために命を捧げる理由がよく分かりませんでした。命を捧げてでも守ろうと思えることがあるのはとても素晴らしいことだと知る良い機会になりました。

プログラムの終盤には教皇さまのミサにあずかる機会や近くでお話を聞ける機会があり、とても貴重な経験をすることができました。

次は3年後にインドネシアで開催されることが決まっています。私は大学生の最後の年なので参加できるか分かりませんが、是非また参加したいと思います。

(高橋)



今回のAYDは私の職場であるエリザベト音大の学生二人と一緒に参加しました。最初の三日間は「教区での日々」と名づけられ、私たち日本人参加者は3箇所（ソウル、ウォンジュ、スウォン）に散らばり、それぞれの教区が用意したプログラムに沿って活動しました。私が行ったスウォンには日本、中国、台湾、バングラデシュからの参加者が集まり、世界遺産にもなっている華城、韓国民俗村、於農聖地などを訪れました。韓国のキリスト教の歴史を紐解くと、特殊な性格を持っていて、最初は海外から宣教者がやってきたわけではなく、18世紀、まず学問として興味を持った韓国の人々が中国に行ってキリスト教を学んで帰り、信徒が宣教をしました。その後神父を中国から招きました。しかし、儒教を重んじる王朝からすれば、危険な思想ということで迫害を受けました。その中で多くの殉教者を出しています。華城や於農聖地は彼らが拷問を受け、処刑された場所です。

於農聖地を訪れた時、聖堂の中で出迎えてくださった神父さんは、CDも出しているシンガーソングライターでもありました。この時、じっくり聴かせる歌だけでなく、ノリの良い曲もあって、熱唱する姿に驚きました。その後、パントマイムや今風の歌で神様と自分とのつながりを表現するグループも登場して、随分日本とは違う雰囲気を感じました。

デジョンでの本大会に入ってから、幾度となく、青年たちの舞台上での出し物を見るチャンスがありました。踊り、歌、演劇等々。一つシンプルだけどよく出来ているものがあります。車に乗っている設定で、最初ある女性がハンドルをとって助手席にイエスを乗せて走っているのですが、途中で様々な誘惑を持った人たちが乗り込んできて、次々とイエスを後ろに追いやっていきます。最後に眠くなった女性は事故を起こしてしまい、乗り込んできた他の人たちは彼女を見捨てて出て行きます。しかし、イエスだけは彼女を見捨てないで抱きしめます。その後、今度はイエスがハンドルをとり、彼女は助手席に乗って再び車は走り始めます。日々の生活の中での自分とイエスの関係について考えさせられる内容でした。

全体から感じたこととして、韓国やアジアの青年たちは、大会の中でのミサなど典礼面において、自分の信仰を自分たちのスタイルで表現する力を既に持っていると思いました。一緒に歌ったり踊ったりしていて、自分の心も開放されるような気がしました。日本人はまだまだ西洋からの借り物を忠実に守る形の表現が多いように思います。このパワーに触発されて、一緒に参加した学生たちも色々な面で変わってきました。より広い視野を持つこと、異なる文化を受け入れること、キリスト教への関心といった点で、前向きな発言をするようになりました。「ミサはつまらないものだと思っていましたが、そうではなくて、喜びと祝いの表れですね。」とも言っていました。大学のミサに対しても、自分たちなりに工夫をしてみたいと意欲を見せています。今後の成長が楽しみです。



私自身も、日本にいて感じている違和感の原因が一つ分かったので、喜びを感じました。日本では、教会にいと静かに、行儀よくしていなければならない雰囲気を感じていました。しかし、自分の中には、神への愛や信仰の喜びを心と体いっぱい表現してみたいという望みがありました。すでに、韓国の青年たちはそのようなことを普通にしていました。驚きました。これから、自分自身が福音の喜びを伝えるものとして、どのような方法を選んでいかに大きく影響を与えたと思います。これから、さらに深めていきたいと思っています。

(援助修道会 Sr. 古屋敷)

フランシスコ教皇からアジアへのメッセージ

8月中旬、フランシスコ教皇が、アジアン・ユース・デーに参加するため韓国を訪れた。初のアジア訪問で、教皇はアジアの若者に向かって何を語ったのか。特に印象に残った言葉をいくつかご紹介したい。

「主は、殉教者たちの英雄的な証によって栄光を輝かせたのと同じように、みなさんの人生を通して栄光を輝かせたいと願っておられます。みなさんを通して、この大いなる大陸の生命を照らしたいのです。」



「若者を励ますフランシスコ教皇」

「神は、わたしたちを愛しておられる。」その信仰を命がけで守り抜いた殉教者たちの生きざまは、その信仰が、真実であることを力強く証し、人々に希望を与えた。いまの時代を生きるわたしたちにも、同じ使命、命がけで神の愛を証する使命が与えられているというのだ。

その使命は、アジアの幾つかの国では極めて切実な意味を持っている。中国やベトナムなどの国では、いまでも迫害が行われているからだ。今大会でも、参加を予定していた中国代表団 120 人のうち 40 人が政府の妨害にあって参加を見合わせざるをえなかったと伝えられている。参加した 80 人も、帰国後、就職妨害などの不利益を受ける危険があるという。自分が同じ立場に置かれたら、いったいどう行動するだろうか。そう考えざるをえなかった。

「若い友人たちよ、この時代にあって、主は皆さんに期待しています。本当に期待しています。『はい』と言って受け入れる準備ができていますか。」



「ソルメ殉教地特設会場」

人間は誰しも、自分に期待してくれる人に対しては、その期待に全力で応えたいと思うものだ。教皇様が、教会が、そして神様が、若者に本当に期待している。そのメッセージは、若者たちに大きな力を与えたに違いないと思う。

「皆さんは、アジア人として、アジアの素晴らしい文化と伝統を愛していることでしょう。ですが、キリスト教徒として、福音がこの遺産を清め、完成させることも知っているはずですよ。」

アジア各国でゆがんだ愛国心が高揚され、自国の文化のすばらしさを誇って他国を見下すような風潮が見られるいま、わたしたちはこの言葉を特にしっかりと心に刻む必要があるだろう。どんなにすばらしい文化も、キリストの謙遜と愛によって清められない限り、争いや憎しみの火種となりかねないのだ。

「目を覚ましていることは私たちの義務です。圧力や誘惑、罪が、聖なるものの美しさや、福音の喜びへの感性を曇らせることがあってはいけません。」

人間は誰でも、心の奥底に聖なるものへの憧れ、すべてを受け入れて下さる神の愛への憧れを持って生まれてくる。神様が、わたしたちを「神の国」へ導くために与えて下さった、道標のような

憧れた。その憧れを守り抜くことこそ、救いへの道に他ならない。

教皇様は、これらの言葉を若者たちに英語で語りかけたが、英語がよく分からなかったという若者たちでさえ、ただ教皇様のそばにいて自分が本当に愛されていることを実感できたと言っていた。言葉や表情、しぐさのすべてから、若者たちを思う教皇様の愛があふれ出しているのを、わたしも確かに感じた。

教皇様の存在そのものが、全アジアに対する愛のメッセージだったと言っているだろう。わたしたちも教皇様に倣い、この大陸に神の愛を伝えてゆきたい。(片柳弘史神父(宇部・小野田ブロック))



「ヘミ城への徒歩巡礼」

※ 次回のアジアン・ユース・デーは、2017年、インドネシアで開催される。

※ 片柳司祭と高橋さんより写真提供をいただきました。



ナルドの花たより

ローマ法王が語る「幸福のための十戒」



(CNN) フランシスコ法王がこのほど、アルゼンチン誌のインタビューに答えて「幸福のための10カ条」を披露した。米ミドルベリー大学講師でキリストの生涯についての著書でもあるジェイ・ペリーニ氏が、解説を交えてフランシスコ法王の言葉を紹介する。

1. 人を裁かない

フランシスコ法王は同性愛に関して「自分は裁くべき立場にない」と発言している。キリストも「山上の説教」の中で、「人を裁いてはならない。自分が裁かれたくないのなら」(マタイ7章)と語った。

2. 他人のために身を捧げる

自分のお金や時間を必要としている人に与える。よどんだ水のようにじっとしてはならない。

3. 静かに行動する

20世紀初頭のアルゼンチンの作家リカルド・ギラルデスの小説から引用。人は若い頃は「あらゆる場所を急流のように流れる」が、年を取るにつれて「静かに穏やかに流れる川」になる。

4. 余暇を楽しむ

大量消費社会は耐え難い不安をもたらした。子どもたちと遊び、休息を取らなければならない。次の買収のことばかり考えて過ごしてはいけない。お金ではなく、時間をうまく使う。

5. 日曜日は家族のために

これは十戒の一節「安息日を設けよ」(出エジプト記20章)に由来する。週に1日は心の求めに応じ、瞑想(めいそう)、礼拝、家族との生活のために充てる。

6. 若者に仕事を

若者が健全であるためにはシンプルな仕事が欠かせない。フランシスコ法王はインタビューの中で雇用創出を環境破壊と結び付け、良い仕事がないのは、自分たち自身や地球に対する尊敬の念が欠けているからだ指摘した。生産的な良い労働にこそ価値があり、華やかな仕事に就く必要はない。金持ちになる必要はなく、普通でいい。幸福はそこにある。良い仕事を持ち、他人のために良い仕事を創出する。

7. 自然に敬意を払う

これは第6項にも関連する。フランシスコ法王は、「人類は無差別で横暴な自然利用によって自殺を凶っているのか」と問いかける。多大な苦しみを伴わずに空気を汚したり、河川を汚染したり、樹木をむやみに伐採したりすることはできない。私たちの周りの不安や苦しきは、元をたどれば資源の不正利用に起因するのではないだろうか。私たちは自分の魂を浪費しているとも言える。

8. 悪いことはさっさと忘れる

自分を困らせたり苛立たせたりする相手について不平を言うてはいけない。そうしたことはできるだけ早く忘れ去る。人のことを悪く言う人は自分自身がみじめになり、私たちもみじめになる。

9. 信教を強要し過ぎない

改宗への勧誘は停滞を招くとフランシスコ法王は説く。自分はキリスト教徒だと公言したとしても、人にはそれ以前に個々の世界観がある。この教えは一見、キリストが世界への布教を促した「大宣教命令」(マタイ28章)に矛盾するように思えるが、フランシスコ法王はこの活動を緩やかに解釈し、実例による教えの方をよしとした。それがキリストの真意だったのかもしれない。

10. 平和のために働く

フランシスコ法王は法王に就任した日からこの教えを説いてきた。エルサレムに行ってユダヤ人とパレスチナ人の連帯を働きかけ、平和のために祈り、平和のために働いた。「平和をつくる者は幸いである」というキリストの言葉そのままに。

<行事報告>

兩宮神父様の聖書公開講座（9月13日・14日）

講座の参加者は両日とも約70名でした。今年は「聖書における『知恵』」がテーマで、神父様は旧約、新約両聖書を通して「知恵」と「愚かさ」がどのような文脈で表現されているかを例示され、「聖書の世界では人間の不完全さ、愚かさこそが神の憐れみの契機としてなっている。」と結論づけられました。

ヘブライ語、ギリシア語の広範な知識や聖書独特の修辞法の分析をもとに展開される講座は興味深く、また会場からの質問に丁寧に回答してくださる神父様の姿勢からは暖かく誠実なお人柄が伝わり、普段は難しいものを感じられる聖書が身近に感じられた2日間でした。

(宣教部 荏原)

御言葉の真意を、静かに凝視して深耕し味わう、その術を知ることは、「どう生きるべきか」を問い直す上で、とても大切であると再実感いたしました。

また「救いへのプロセス」の解説は、信仰生活の基本的なチェック・ポイントになりそうです。

毎日の喧噪の中でも、落ち着いて聖書を原文（希語・ヘブライ語）で読めるよう学習する情熱も増しました。

神様と雨宮神父様に、改めて感謝申し上げます。

（西宮市在住 62才男性）

秋が近づくと、雨宮神父様の講義に耳を傾ける時が来たと思う。語学を駆使して縦横無尽に聖書を解き明かされるのは刺激的だが、むしろ神父様の物静かな語り口から滲み出る神様への畏れと信頼、人間としての謙りの思いに心を濯われる。曰く、人間の知恵の延長線上に神の知恵はない。神様のための場所を生き方の中にもつことが、本当の知恵。創造された人間には欠けや弱さがあるが、それは私達を神様の憐れみに開いてくれる、と。神様に聞こう。来年の秋が待ち遠しい。

（MBYH）

第 35 回三日月会総会（9月15日）

毎年9月15日の敬老の日に行われる三日月会の総会が今年は会員539人のうち過去最高の120名をお迎えして、1時からアルフレド神父様のごミサがあり、そのあと講和「まじわり」と題して三日月会への熱い思いが語られました。



「ごミサが終わって10分もたたないうちにみんながサーっと帰ってしまう教会、折角あるイグナチオホールは電気もつかず真っ暗なまま・・・みなさん、これで良いのでしょうか」「三日月会が中心になり交わりの機会をもっと増やす努力をしてほしい。そこから新しいきずなが生まれ、教会に来たくても来られない人ともつながりができますように」と話され、これからの三日月会が担うことの出来る役割として具体的な宿題を頂きました。

神父様のご期待にそうよう地区会のご協力を得ながら、何年掛かりかでのこの宿題を実行しようと思います。

そのあと引き続きイグナチオホールに移って「総会」が開かれ、活動報告や新入会員の紹介と懇親会に楽しい時間を過ごしました。多くの方々の準備とご協力に感謝します。

新入会員の蛭田さんが写真を撮ってくださいました。

（三日月会会長 鈴木）

爽やかな秋晴れに恵まれた敬老の日、9月15日(月)午後1時より、主聖堂において、これ迄で最も多い120名の三日月会会員が集い、アルフレド神父様司式によるミサが捧げられました。

引き続き、神父様から「まじわり」のテーマで講話があり、信徒会の中で現在539名の会員を有する三日月会が推進役となって地区会に協力し、信徒間のまじわりを深めていくようにと要望されました。

大阪大司教の中でも特に信徒数が多い六甲教会では、主日の朝、挨拶の輪を広げるように雰囲気づくりをすることから始めるのが良いのではないかと思います。

午後2時20分から会場をイグナチオホールに移して三日月会総会が開催されましたが、会場は満席の状態でした。鈴木会長の司会のもと、アルフレド神父様のご挨拶とお祈りの後、事業報告、会計報告、審議事項等が行われました。今年新しく会員となられた方々の紹介、挨拶、また初めて出席された会員の紹介、挨拶等、終始和やかな雰囲気の中で会話もはずみました。（中村）



秋晴れの9月15日、敬老の日に第35回2014年度の三日月会総会が開催されました。

午後1時よりアルフレド神父様司式によるごミサが始まりました。

この日は「悲しみの聖母」の記念日で十字架上のイエス様の苦しみを傍で共にされたマリア様は多分50歳半ばかりで、今の年代に見直せば多分70歳半の体力であられたことでしょう。との神父様のご説明で、くしくも敬老の日、三日月会総

会の日であり年代的に3つの共通点のある記念すべき日となりました。 z z z

引き続き聖堂で、アルフレド神父様の「まじわり」というタイトルでのご講和がありました。日曜日、ごミサの中では祈りとイエス様との繋がり、信仰と心のまじわりを深めることができます。そしてミサ後には教会に来られた方々とのお喋りやふれあいで人間同士の肉体的な面でのつながりとまじわりを深める機会をもっと作りましょう。今はミサ後10分で教会は人気なくなり静かになってしまうそうです。そして教会に来られない方々とのまじわりも出来るような架け橋を皆で担いましょう。と神父様の熱い思いが伝わるお話でした。

その後イグナチオホールに移り、総会と懇親会となりました。今年は例年でない120名という多くの方々の参加でホールが溢れるばかりの賑わいでした。会長の鈴木肇さんによる説明で、会員総数が539名、その内新入会員35名、当日の出席者は8名という会員動向や年間の集会動向などが報告されました。テーブルには役員の方々によってお菓子や飲み物が用意されており和気あいあいの熱気にあふれた懇親会となりました。

十河さんの伴奏で「ふるさと」「赤とんぼ」をみなさまでの力強い合唱となり盛り上がりました。「ふるさと」は満州生まれの十河さんが終戦後引上げ船で日本の佐世保に到着した時に船内の全員から大合唱が起こった歌というお話をされ、その時の様子を思うと胸が熱くなりました。「うさぎ追いかの山・・・」

最後に高山神父様からの「自分は何も出来ないと思うのではなくて、出来る事を何でもする。という姿勢で過ごしましょう。」と締めくくりのお言葉をいただき、感謝のお祈りで解散となりました。

新入会員の一人として初参加させていただきましたが、諸先輩方のパワフルな行動力、思いやりの心意気、親近感のある雰囲気を目の当たりにして、エネルギーを頂きました。高齢化が心配されるこの頃ですが六甲教会はまだまだ心配ないと確信しました。(川合)



《各部だより》 各専門部会の活動をお知らせいたします

📖 小教区評議会

10月12日(日) 評議会(10時ミサ後)

📖 教会学校

10月18/19日(土/日) 練成会

📖 施設管理部

10月26日(日) 部会

📖 社会活動部

10月3日(金) 連絡会(初金ミサ後)

📖 典礼部

10月18日(土) 部会 10時

26日(日) 侍者練成会 11:15~16:00

📖 三日月会

10月20日(月) ミサと懇親会 14:00

📖 広報部

11月2日(土) 教会報印刷

《 お 知 ら せ 》 教会のみなさまに知って頂きたい活動やお知らせです

★社会活動部より★

10月1日(水) 10時	手芸の集い	第1・2会議室	どなたでも参加自由です。
3日(金) 初金ミサ後	社会活動部連絡会	第2会議室	チャリティバザーの打ち合わせ (出店ご希望のグループの方はご参加ください)
11日(土) 10時	炊き出し	イグナチオお台所	
	小野浜グラウンドにて配食、おじさん達のお話し相手だけでもOK!		
19日(日) 10時ミサ後	ふれあい広場	イグナチオホール	お弁当・食料品・手作り作品の販売
26日(日) 10時ミサ後	社会活動学習会「今日から始めよう心と体の健康づくり」 講師：大西道生 於：イグナチオホール 参加費：無料		
27日(月) 9時半	ともしび ケーキづくり	イグナチオお台所	

★バザーの『古本市』について★

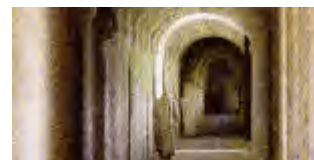
2014年11月9日の六甲教会チャリティバザーに於いて、新たに『古本市』を開くことになりました。“新たに”とは、今回の『古本市』の計画が、数年前まで行われていた従来の『古本市』と少々趣を異にした形であるからです。

ご家庭などでお手持ちの書籍のなかで、ご自身で読まれて是非他の方にもお奨めしたい本を持ち寄っていただき、互いにシェアする場としたいと考えています（これは地区役員会のバザー準備委員会の議論の中で提案されたものです）。具体的には古本市に出品していただく書籍について、次のような手続きを取っていただくこととなります。

- (1) 古本市に出品される書籍ごとに、ご自身で簡単な紹介メッセージを書いていただき、それをタグにして書籍に添付して古本市に出品していただきます。
※紹介メッセージはタグに直接記入いただいても結構です。
※タグには必ず氏名を記載いただきます。
タグの記載例としては、
「とても面白くて時間を忘れます ○○△△」
「アメリカの現実がよく描かれていてわかりやすいです ○△※」
「日頃疑問に思っていることをわかりやすく解説しています XX YY」・・・ などです。
- (2) 出品いただく書籍は教会受付にお持ちいただきます。用紙に「お持ち頂いた書籍名、お名前と連絡先」を必ずご記入ください。その後の手続きは受付の指示に従ってください。持込期間は、10月12日～11月2日です。
- (3) バザー当日の「古本市」：書籍の販売場所は図書室(信徒会館2F)となります。
- (4) 出品いただいた書籍で、もし売れ残った場合は、出品いただいた方にお返しすることとなります。御協力いただき、お引き取りをお願いします。

映画感想 ～「大いなる沈黙へ」を観て～

この映画で描かれているのは、フランスアルプス山脈に建つ伝統的修道院「グランドシャルトルーズ」。貧しさと質素こそが修道会の理想だと説く、カトリック教会の中でも最も戒律が厳格な男子修道会である。



この修道会のこれまで表に出ることのなかった内部での生活が、「今初めて明らかにされる。音楽なし、ナレーションなし、照明なし、そこにあるのは静けさと降り注ぐ光、降りしきる雪、ただ永々と営まれる修道士達の暮らし」という宣伝を目にし、非常に興味をそそられた。と同時に信仰を持つ者として、観ておかなければならないという使命感のようなものも感じた。

そのような心持ちで実際映画を観終えた感想は、一言で言うとあまり良いものではなかった。このように書くと語弊があるが、上映中私が感じていたことは一貫した違和感のようなものだった。観ておかなければならないと思った使命感とは裏腹に、観てはいけなものを観ているという罪悪感のようなものに苛まれた。

まるでフェルメールの絵画をそのまま切り取ったかのような情景、働き祈る修道士達の横顔、静けさの中に響く鐘の音や、匂いや温度まで感じられそうな風の吹いてくる様子、その一つ一つがあまりにも美しく、ともすればそこに身を委ねて気持ちよく浸ってしまいそうになった。だから、なぜこんなに違和感があるのだろうかと思ひ不思議だった。その違和感の正体がわかったのは、映画も終盤の頃だった。

この修道院での暮らしは、神への祈りを除いてはまるで刑務所のようなのだ。ここにいる修道士たちは、私たちが持っているものをほとんど何も持っていない。彼らにとって、生活の全てが祈りなのだ。神と向き合う時間、そこにスクリーンを通して傍観者である「私」が介入する余地などどこにもない。映画の中で、修道士たち一人一人が、何をするわけでもなくただ 30 秒間ほどこちらをじっと見つめるというカットがところどころに挿入されている。とても印象的なシーンだ。その修道士たちの目には、俗世の一切のものを見ていないと思わせる拒絶が感じられた。全ての活気が消え失せているような印象を受けるのだ。

私が感じた違和感、それはこの世界で便利なものに囲まれ自由を謳歌しているような私が、実は物やお金や物欲の牢獄に捕われている囚人だということを感じさせられることから来るのだろう。

俗世にいる私たちが、この映画の修道士のような生活を送れるか、それはわからない。しかし、祈りとはなにか、信仰とはどのようなものか、死に向かって一歩ずつ歩いて行く人の人生において、何が本当に大切なものか、深く考えさせられる時間だった。 (松井)

※ 「大いなる沈黙へ」は現在各地で上映中。興味のある方は映画のオフィシャルホームページをご覧ください。カトリック神戸地区つながりホームページのスポット情報館からもアクセスできます。(つながり URL <http://catholic-kobe.org>)

《 図書室からのお知らせ 》 *****

カトリックの『新聞・雑誌』について

カトリックの立場から定期的に刊行されている新聞と雑誌の一部を簡単に紹介いたします。定期購読されるか、カトリック書店・キリスト教書店等でお求め頂けます。「カトリック新聞」と「福音宣教」については事務室前に最新版と申込書が置いてあります。

☆カトリック新聞 — 週刊 カトリック新聞社 対象：キリスト者とキリスト教に関心のある方
日本カトリック司教団が発行する全国紙 国内外のカトリック教会の動向を伝えると共に、キリスト者の生き方を分かち合い、教会指導者たちによる導きを紹介する。

☆カトリック生活 — 月刊 ドン・ボスコ社 対象：カトリック関係者
フルカラーでカトリックの今を描くビジュアル誌 変動する社会情勢と混乱する価値観の中で、人生の間や社会の問題に対し、カトリックの視点を提示していこうとする。

☆福音宣教 — 月刊 オリエンズ宗教研究所 対象：信徒・修道者・聖職者
キリストを伝えるカトリック月刊誌 信仰を養うためのヒントを共有し、社会を福音の価値観から見つめ直すための記事を届ける。

☆ほし家庭の友 — 月刊 サンパウロ「家庭の友」 対象：キリスト教信徒
子どもから大人まで、家庭に一冊 家庭、教育、信仰、高齢者の健康などについて、家庭の中で一緒に読める雑誌を目指す。

☆あけぼの — 月刊 聖パウロ女子修道会あけぼの編集部 対象：女性
忘れかけていた自分自身と出会う月刊誌 キリスト教価値観に基づき人生を歩む中で出会う問題に向き合い、特集を通して共に考える。

☆聖母の騎士 — 月刊 聖母の騎士社 対象：キリスト教に興味を持っている方
一人でも多くの人にキリストを信じる喜びを 聖書や聖人について、巡礼地やカトリック信徒の姿などを紹介しながら、生活の中にキリスト教の雰囲気をもたらすお手伝い。

☆福音と社会 — 隔月刊 カトリック社会問題研究所 対象：青年キリスト信者
社会を見抜くカトリックの硬派ジャーナル その時々 of 社会的関心事に福音の光を当てて分析・解説・論評し、信徒の持論の構築に役立てる。

※ このコーナーでは、教会員の方々と分かち合いたい図書・映像などの紹介や、皆様の感想文を募りたいと思います。図書室に在る本やDVDでも、無いものでも構いません。原稿をお待ちしております。後日ご連絡させて頂く必要がおこった時のため、提出原稿には必ず氏名・連絡先をご記入ください。

原稿提出先： ①教会事務受付
②教会 Fax078-851-9023
③E-mail: renraku@rokko-catholic.jp



みんなの広場

ロザリオ

最近はこのことを聞くことは殆どなくなったようだが、嘗て10月は「ロザリオの月」といわれた。今も知られているのは5月の「聖母の月」くらいか。6月の「聖心の月」、11月の「死者の月」などはどうなったのだろう。

10月7日は「ロザリオの聖母」の記念日になっている。1571年10月7日にギリシアのコリント湾レパント沖での、オスマン帝国の海軍と、教皇・スペイン・ヴェネツィアの連合海軍との海戦で、キリスト教徒の艦隊がオスマン帝国の艦隊に大勝したのは、ロザリオの祈りで聖母に祈った結果だとされ、聖ピオ5世によって祝日とされた。レパントの海戦、聖ピオ5世、ロザリオにつ

いてはWikipediaに記事がある。霊性にかかることを別にして概ね信用してよいと思う。又「毎日のミサ」10月号にも記念日のミサ固有文があり、そこにあるヨハネパウロ2世の言葉はロザリオを言い尽くしていると思う。

最近ロザリオの祈りを知らない信徒がいて驚く。「昔」はバッグやポケットには必ずといってよいほどロザリオを入れていた、使わなくても。昔からの習慣だといえそうともいえようが、長年引き継がれた信仰の「習慣」には、現代の日々の生活の中にも疎かにできないものも多々あることを知っておこう。

ロザリオの難点は50個を超える珠、どうしても長くなってしまふ。戦後アメリカから10個の突起がついた指輪がもたらされた。これをはめてロザリオの祈りをしながらハイウエーをぶっ飛ばすという。そんなものを作らなくても神様はわたしたちに10本の指を与えてくださっている。これならつり革にぶら下がっていても使える。「ロザリオ」、それはマリア様に手をとられて主のみ跡を行くこと。
(ヨハネ 三好)

3才のお祈り

「イエス様、お父さん守ってください。お母さん守ってください。おじいちゃん、おばあちゃん、おばちゃん、ひかるちゃん、はるちゃん、ひかるちゃんパパ、ひかるちゃんママ、学校の友だち、ミッシェル、リンダ、ジェーシー、れいこさん、ダニエル守ってください。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン！」

これは3才になる姪の朝のお祈りである。なんと素直で可愛らしいお祈りだろう。自分の好きな人を思い出し、順番にその名前を口にしているだけの単純なお祈りではあるが、はっとさせられる。

まずは愛する人の幸せを祈る。マザーテレサも言っておられた。「愛は家庭から始まります。まずは家庭から始めてください。やがて外へと愛の輪が広がって行くでしょう。」
(アビゲイル)

恵み

生きてると良いことも沢山ありますが、理不尽な事にも幾度となく出会います。潔癖症の私は、そんな時、誤解されているのが嫌で、誤解を解きたくて、「どうして」「何で」と原因追及に右往左往したものです。

しかし、今は、心がなえいだ時、傷ついた時、悪意に苛まれた時、さげすまれた時、「山上の説教」(マタイ5:3-12)を繰り返し何度も読みます。「心の貧しい人々は幸い」「悲しむ人々は幸い」「柔和な人々は幸い」「義に飢え渴く人々は幸い」……。直接、神様が慰め、励ましてくれます。こんなありがたいことはありません。次第に心が落ち着き、穏やかになり、深いありがたさを感じます。このありがたさの中で何とも言えぬ、深いしづけさへいざなわれます。

ミサの中で司祭が唱える平和の祈り「私は平和をあなた方に残し、私の平和をあなた方に与える」というキリストの言葉と重なります。

理不尽なことも恵みへと変わっていくのです。この世に無駄など何もないかのように。(J.Y.)

教会報 11月号の発行は、11月2日(日)です。 編集会議は、10月26日(日)です。 記事原稿は、10月19日(日)正午までに信徒会館受付へご提出願います。(広報部) http://www.rokko-catholic.jp	カ	ト	リ	ツ	ク	六	甲	教	会						
	〒	6	5	7	-	0	0	6	1						
	電	話	0	7	8	-	8	5	1	-	2	8	4	6	
	F	A	X	0	7	8	-	8	5	1	-	9	0	2	3
	発行責任者	アルフレド・セゴビア	編	集	広	報	部								